

生命を活性化するための試作

親子で体感する三鷹天命反転住宅…

芸術家、思想家、建築家とも呼ばれる荒川修作が東京都三鷹市に手がけた「三鷹天命反転住宅」は、一般的な住宅とは大きく異なる。球体、円筒、立方体のユニットが積み重なった構造。外観と内装は極彩色で塗り分けられ、床はデコボコ、しかも傾斜している。これは「偶然性や不思議を日常的に体感することで、好奇心や意欲を生み出し、肉体的体験を引き起こす」という荒川思想を顕在化した住宅である。

つまり、五感を刺激し、生命力を活性化することを目的とした装置なのだ。今夏「ディスカバリーチャンネル」と「スカイパーフェクTV!」の特別プログラムとして、何組かの親子がこの実験的な住宅を訪れた。脳科学者・茂木健一郎さんの授業を受け、“反バリアフリー”とも

呼べる空間に体をゆた

ねた親子は、果たしてどんな反応をしたのか？

どんな発見があったのか？



荒川修作と彼のパートナー、マドリン・ギンズの

思想「宿命反転都市構想」

生きていくことに悲観的になっている人類は、滅び行く運命を歩き始めている。それを食い止め、運命を逆転させるにはどうすればいいのか。その思索から導きだされたのが、荒川+ギンズの「宿命反転都市構想」だ。そこに住む人々の身体的・精神的影響に着目し、自然と共存する街づくりを進めるとともに「次世代へ継承していく持続的なライフスタイル」を構築する考え方である。



ARCHITECTURAL BODY
ARAKAWA+MADELINE GINS
<http://www.architectural-body.com/ja/>



ディスカバリーチャンネル
<http://japan.discovery.com/>
イベントの情報は、ディスカバリーチャンネル公式ホームページで紹介いたします。

スカイパーフェクトTV!

<http://www.skyperfectv.co.jp/>
三鷹天命反転住宅で開かれた「アハ!体験 茂木健一郎さんと発見する夏休み」の様子は「SKY PerfectTV! 親子ドキュメンタリー教室」で放送します。
放送Ch: パーフェクト チョイス (スカパー! Ch.180)
放送日時: 9月30日 (土) 13:00~14:00 他



知覚が目覚める住宅

三鷹市大沢に誕生した「三鷹天命反転住宅」は住宅でありながら、一方で既存の住宅のあり方を壊す試みである。注目すべき点は、従来の住宅とはまったく異なる目的で建てられたことだ。

天命反転とは、精神と身体を活性化するという意味。つまり、この住宅は生命を活性化するための装置なのである。コンセプトを決め、建築を担った荒川修作は、「生命を生み出すための道具」「生命の無限の力を体験できる命の器」と呼んでいる。

全9戸。1戸の専有面積は52.38~60.65㎡。間取りは2LDK~3LDK。すべての床が曲面から成り、しかも傾斜しているので、バランスを保ちながら歩かな

ければいけない。意識しなくても身体のいろんな部分や筋肉を使う。

中央に大きなダイニングキッチンが設けられ、その四方に球体や四角の部屋、シャワールーム、トイレが配置されている。直線で移動できないので、部屋に向かうには遠回りしなければいけない。また収納スペースがほとんどないので、天井のフックに収納袋をぶらさげるなど工夫しなければいけない。床が傾斜しているので、家具も置きづらい。

原色で彩られた球体の部屋がある。座るにしても寝転ぶにしても、やはりバランスを保ちながら行動に移さなければいけない。視覚も十分に刺激される。たとえば「黄色にくるまれた」という記憶が脳の奥底に刻まれていくのだろう。荒川修作が意図したとおりである。

視点を変えれば、バリアフリーのフラットな空間は、人間が本来宿している、自然に抗う生命力を退化させるといふ弊害があるともいえる。そもそも自然と共存するということは、デコボコの道や狭い道を注意して歩いたり、家族や知人がいればころばないように手を差し伸べたりして進むということから始まる。

三鷹天命反転住宅は万人に理解される住宅ではないだろうが、「人間が潜在的に宿している知覚を目覚めさせる」という利点は確かにありそうだ。



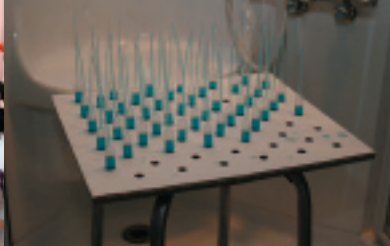
見る角度によって建物のフォルムと印象が異なる三鷹天命反転住宅。住むにあたって「使用法」が用意されている。



「アハ!体験」の授業の様。脳科学者の茂木健一郎さんが「南の島大学脳研究所 دکتر茂木」に扮して、発見することや考えることの楽しさを授業スタイルで伝えた。



創作料理ユニット「GOMA」プロデュースの「味覚の不思議を食べる部屋」では、不思議な食べ物が入った部屋が部屋のあちこちで供され、親子が「味覚体験」に挑んだ。



これは創作料理ユニット「GOMA」がふるまった不思議な食べ物のひとつ。ゲーム盤かオプジェに見えるが、その正体はスポイト状の容器に入った飲み物。



「味覚の不思議を食べる部屋」の空中に浮いているのは、天井から吊り下げられたお菓子。ポップな三鷹天命反転住宅に似つかわしい演出である。

そのとき親子はどう感じたか

三鷹天命反転住宅で「アハ!体験 茂木健一郎さんと発見する夏休み」と題して開かれたイベントに参加した親子は、どんなことを感じたのだろうか。参加者は小学3年生～6年生の子供とその親。子供たちに

成長する環境を提供する立場にある親と、これからいろんな体験をしていくであろう子供たちにイベント参加の感想を聞いてみた。



石村さん親子
(千葉県在住)

父：「荒川さんの作品は障害を用いたものが多く、実験的な要素や提案の要素があって好感が持てます。ただ一般的に受け入れられるのか、大量に造って普及していくものなのかと考えると疑問です。天命反転住宅は芸術かという方向性があり、安くして大量生産しようというプロジェクトとは大きく異なるのではないのでしょうか。建物をバリアフリーにすれば多くの融資が受けられるという制度がある中で、わざわざ反バリアフリーを形にしているということは、リスクを承知で発表しているわけでしょう。これは作り手の指向に合う人に住んでもらいたいということだと思います。すべての部屋がこの住宅のようだと問題はありますが、部屋の一部分に用いるのであれば問題ないでしょう」

娘：「こんなに色があふれている家は、とてもおもしろくて、少し住んでみたいと思いました。この部屋だとどこに机を置こうか考えてみました。丸い部屋は勉強が来たら、ちよつと自慢できるかもしれません」



藤本さん親子
(栃木県在住)

父：「三鷹天命反転住宅の情報は何も持たずにやって来ました。作り手の意図はまだよくわかりませんが、キッチンが中央にあるということから、食べるということを中心に据えて家を作ると、こんな配置になるのかなと感じました。そしてキッチンからの部屋にも同じ距離で行けるということに趣旨があるのではないかと。ここで暮らすとしたら、1ヵ月くらいは生活できるんじゃないかな」

娘：「いろんな形の部屋があったり、真ん中に台所があったりしておもしろい。将来、こんな家があったら買ってみたいです。床がデコボコしているのにはもう慣れました。部屋の色ははっきりした濃い色ばかりですね。こんな色の部屋は初めてです」

「芸大学生たちのインсталレーションの部屋」には、サンドバッグが吊るされ、男の子も女の子もボクサーや格闘家になりきり、叩いたり蹴ったりして遊んだ。



福田さん親子
(山口県在住)

母：「娘がいろんなお話を楽しみに来ていたので、茂木先生のお話を楽しみにして来ました。夏休みに実家に戻って、この建物の前を毎日通っていたのですが、幼稚園だと思って見ていました。まさか住宅だったとは思いませんでした。娘が「建築家になりたい」と言っているの、この建物を見るのも刺激になっていいかなと思いました。デコボコの床は、身体感覚が研ぎ澄まされていいと思います。丸い部屋は子供が楽しめるのでいいですね。色については原色づかいなので、どんな人が住むのだろうという興味がわきます」

娘：「この住宅は、おもしろい形をしているなと思いました。勉強するなら、丸い部屋かな。部屋にいろんな色が塗ってあるのが楽しいです」



部屋の中央に設けられた、リビングダイニング。つまりこれを囲むように部屋は広がっている。



曲面が集まってできているので床はデコボコと波打っている。慣れるまで歩きづらい。しかも床は途中で傾斜している。

「芸大学生たちのインсталレーションの部屋」では、住宅にちなんだ色の風船を使った遊びが大好評。

子供たちは口々に「かまくらみたい」「机が置けないぞ」「宇宙船みたい」「本はどこに置いたらいいんだろう?」と話す。球体なのでその声は大きく反響する。荒川修作はこの球体の部屋を「孤独にならない部屋」と呼んでいる。





半円で囲まれたこのスペースはシャワールームとトイレ。この床も少し斜めになっている。



棟と棟の間には、ゆるく曲がった細い道が設けられている。これは生活する者同士が声をかけ合ったり、道を譲ったりするよう意図して設計されたものだ。



2階通路からエレベータフロアを見る。床、手すり、階段、天井、柱のすべてに異なる色が使われている。「ビビットな色のテーマパーク」とも呼べそうだ。



配管にも色が塗ってある。「生命が活性化すると、それまで見えなかった色が見える」とは荒川修作の弁。



大西さん親子

(東京都在住)

母：「茂木先生の授業を楽しみにして来ました。インターネットを見て、この住宅がバリアフリーに逆行する住宅であることを知り、逆転の発想に興味を覚えました。まさに五感を刺激する住宅ですね。まずデコボコの床で足の裏が刺激され、色を多用しているので色彩感覚も刺激されます。一般の人が住むには生活しづらいでしょうけど、クリエイティブな仕事をしている人やデザイナーの事務所には適しているのではないのでしょうか」

息子：「床がデコボコしているのは、足のマッサージみたいなものかな。こんなにいっぱい色を使っている家を見たことがなかったのでびっくりした。暮らしてみたいと思ったけど、ペンキが落ちてきたら、また塗らなくちゃいけないから大変そうに思った。この部屋に暮らすんだと思ったら、窓側に机を置こうかなんて考えました」



海田さん親子

(神奈川県在住)

父：「この住宅は部屋の真ん中に台所があるから、みんなが部屋の中心に集まります。こういう住み方もあるのかと思いました。部屋を閉じればプライバシーも確保できるでしょう。家族が同じ息遣いの中で、お互いの存在を感じながら生活できるのはいいことです。また、夏休みにこういう親子体験を設けたことは貴重な時間になったと思います」

娘：「床がデコボコだから、健康になるように思いました。部屋の色はカラフルでかわいい。半分くらいは住んでもいいと思いました。いろいろ工夫したら、4人でも5人でも住めると思います。茂木先生の授業を受けて思ったことは、自分が考えた答えをずっと心に秘めているよりも、みんなの前で発表して一瞬でも「アハ！」っていう思いをしたほうがいいということです」



田中さん親子

(埼玉県在住)

父：「子供が楽しんでくれたので良かったと思います。この住宅は通常の人の住む家としては造っていないでしょう。私はこれを住宅とは見ずに、あくまで芸術として、あるいは別の目的で作られたように感じました。私自身はけばけばしい色を見ると引いてしましますが、子供をこういう場所に連れてきて、好きなだけ遊ばせることも大切なことだと思います」

息子：「床がデコボコなので、歩く足が痛かった。僕はここに住みたいとは思わない。丸い部屋はおもしろいけど、丸いから椅子や机が置けないと思った。でも、部屋の色はきれいだった」

Text by 倉田 衆

Aha! Experience

脳科学者の茂木健一郎さんが語る

「変わった空間がもたらすユニークなクオリア」

「アハ! 体験」とは、脳で起こるひらめき体験、一瞬の気づきのことです。今日参加してくれた子供たちは、デコボコの床に座るなど思い思いの場所で話を聞いてくれました。クオリアとは我々の脳が感じる質感のことですが、人間は慣れ親しんでいる環境に差や動きを作らないと、気づきが生じないんです。普段と違う空間の中に入ることによって感性が立ち上がり、ユニークな質感に出合えるのです。そして子供たちが自宅に戻った時に、自宅が持つ独自の質感に気づいてくれるといいなと思います。それもひとつの「アハ! 体験」でしょう。



茂木健一郎さんのブログ「クオリア日記」

<http://kenmogi.cocolog-nifty.com/qualia/>